

『古代アメリカ』3,2000,pp.67-82

<研究ノート>

『クロニカX』—研究史と問題点—

井上 幸孝

(大阪外国語大学非常勤講師)

【キーワード】

アステカ、メシーカ、ナワトル語、クロニカ、歴史叙述

Aztec, Mexica, Nahuatl, chronicle, historiography

1. はじめに

古代アメリカ諸文明に関して我々が得ることのできる知識の大半は考古学調査によるものである。だが、対象とする時代がスペイン人による征服直前の数世紀の場合、主に征服以後に記された文書史料から非常に多くの貴重な情報を引き出すことができる。このことはメソアメリカ中央部のアステカ文明に特にあてはまり、文書史料の存在ゆえ、質量ともにそれ以前の時代を凌ぐ詳細な情報を得ることが可能である [López Austin 1996: 175-176; 青山・猪俣 1997: 198]。これらの文書史料はヨーロッパ人によるいわゆる発見・征服を扱ったその他の史料とともにクロニカ¹⁾と総称されているが、そうしたクロニカの見直しは近年急速に進められてきている [網野 1995; 染田 1995, 1998]。そこで重要課題のひとつは、征服以前の社会に関する情報がいかにしてクロニスタに伝達され、クロニスタがそれをどのように解釈し、その結果クロニカに認められた情報が現在の我々の認識をいかに規定してきたかを解明することである。そしてそれらの情報が伝達・解釈されていった経緯を整理し直し、考古学や隣接諸分野の研究成果と協力する形で従来の「アステカ像」を再検証することが現在必要な時期に来ていると筆者は考えている。

こうして既製のアステカ像の再検討を進める上で不可欠な作業の一貫として、本稿ではメソアメリカ中央部のメシーカ人の歴史を伝える『クロニカX (Crónica X)』を取り上げたい。数あるクロニカの中からこれを選択する理由は、それが以下のような際立った特徴を持っているからである。まず、『クロニカX』はサアグンが編纂した『フィレンツェ文書 (Códice Florentino)』²⁾と並んでアステカ史の重要史料とされてきたこと。次に、16世紀にナワトル語で作成されたとされる『クロニカX』そのものは現存せず、これをもとにして書かれたとされる複数のクロニカが現代に伝えられているに過ぎないことである。すなわち、『クロニカX』という名称は20世紀前半にバーロウ (Robert H. Barlow) という研究者が名付けたもので、この文書が実在したか否かは未だ証明されていない。しかし、バーロウによる命名から半世紀を経た1990年代半ば以降になって、この『クロニカX』を見直そうとする2編の論考が相次いで発表された。この新たな傾向を受けて現時点における『クロニカX』の展望を示しておくことは、今後その内容をアステカ史の再構成に活用していく上で欠かせない作業であり、さらに他の情報源を洗い直す上でも有益な情報を提供するであろう。こ

のような関心に基づき、以下では『クロニカX』の研究史を概観し、その後、問題点を筆者なりにまとめてみたい。

2. 『クロニカX』研究史

A) バーロウ以前と『クロニカX』の誕生

「仮に『クロニカX』が存在しないとすれば、それを創り出す必要がある」[Barlow 1990(1945): 13]。バーロウは『クロニカX』を命名した論文(1945年初出)の冒頭をこのような言葉で始めた。だが、『クロニカX』と名付けられる以前からそのような文書の存在は指摘されていた。議論は19世紀後半のある文書の発見に端を発する。

1856年、メキシコの歴史学者ラミーレス(José Fernando Ramírez)はメキシコ市のサン・フランシスコ修道院である文書を発見した。その文書は一見、様々な断片を集めて綴じたものと思われたが、彼が綴じ目を外して原稿を並べ替えると、3つの付篇を伴った1編の完全な文書あることが判明した。その原稿は左右二列に分割されており、左側にはスペイン語の文章が書かれていたが右半分は空白のままであった(図1)。その空白部分にナワトル語テキストが書き込まれるはずだったと考えたラミーレスは、本来その文書がナワトル語(当時の用語ではメシコ語)で書かれたものであるという見解を明らかにした[Alvarado Tezozómoc 1980: 10-11]。発見された文書は彼の名に因んで『ラミーレス文書(Códice Ramírez)』と呼ばれ、1867年にアルバラード・テソソモク(Hernando Alvarado Tezozómoc以下、テソソモクと略記)の『クロニカ・メヒカーナ(Crónica mexicana)』との合本という形で初めて公刊された³⁾。その初版本の編者オロスコ・イ・ベラ(Manuel Orozco y Berra)はナワトル語の原典が存在したという説を受けて次のように述べている。

この貴重な作品[原典]の著者は純血のメシコ人で、彼の母語でそれを書いたようである。以下に述べることだけが、この書物についてわかっている。それはフアン・デ・トパール神父によって翻訳された[...]。メシコ語の原典から[...]神父ディエゴ・ドゥラン師は彼の書の中心部分を取った。というのも、彼自身、何度となく翻訳していると述べているからである。テソソモク[の『クロニカ・メヒカーナ』]はこのメシコ語で書かれた書物の第三の翻訳である。この著者自身はそうのように述べておらず、翻訳したのか写し取ったのかも言及していない。しかし、『クロニカ・メヒカーナ』、無名作者[『ラミーレス文書』]、ドゥラン神父[のクロニカ]を注意深く読み比べれば、それが同一であるということは明らかである。[Alvarado Tezozómoc 1980: 161-162]

また同時代の歴史家・劇作家であるチャベロ(Alfredo Chavero)は引用文中の3編のクロニカにアコスタの『インディアス自然文化史』の第7書を加え、「これら4編のクロニカ[...]それらは実際には1つのクロニカである」との見解を明らかにしている[Alvarado Tezozómoc 1980: 167]。

アコスタとドゥランのクロニカに関しては、16世紀当時から両者の内容の類似が指摘されていた[Acosta 1962: xii, lxxx; Barlow 1990(1945): 13]⁴⁾。だが、アコスタ自身が述べているように、『インディアス自然文化史』第7書の執筆に利用された直接の情報源はドゥランのクロニカではなく、同じイエズス会の神父フアン・デ・トパール(Juan de Tovar)が彼に提供したものであった[Acosta

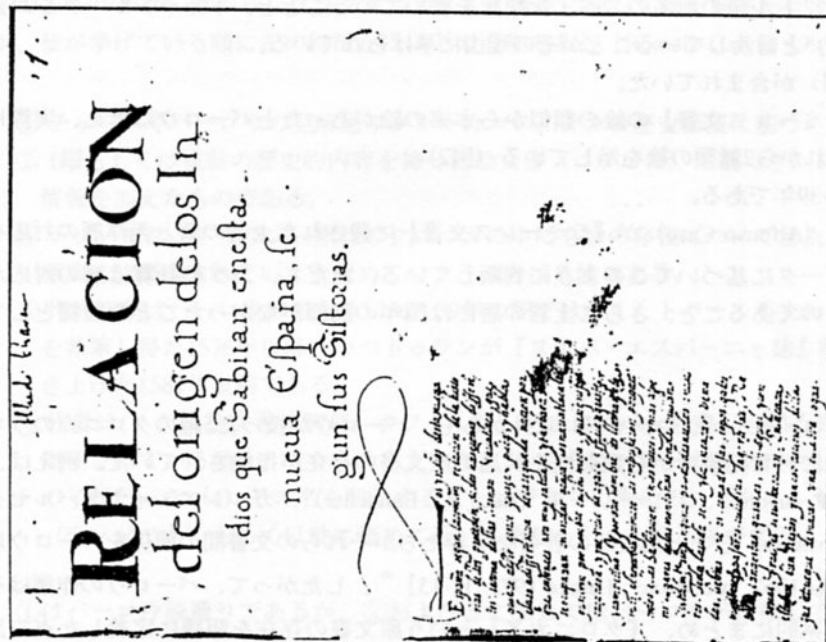


図1 『ラミレーレス文書』第1葉 (Lafaye 1972)



Lámina 2. (Arriba, Durán, cap. 30. Abajo *Códice Ramírez*, lám. II). El cerro de Coatepec, cerca de Tula. A mano derecha está sentado el personaje llamado Ténoch (*te-it*, piedra, y *noch-it*, nopal). A mano izquierda, otro individuo cuyo nombre consiste de los elementos *tochtli* (conejo), *pená-tli* (bandera), y *ilan-tli* (dientes). Ese último elemento se aprecia en las acuarelas del manuscrito de Durán, aunque parezca ser una casa (*ca-itli*) en este grabado defectuoso del *Atilas* publicándolo.

図2 パーロウによるドウラン (上) と『ラミレーレス文書』(下)

の図版の比較：コアテペクの描写 [Barlow 1990: 25]

1962: 289 (邦訳 下 257)]⁵⁾。アコスタが利用したトバルの文書（『インディオの起源に関する報告 (*Relación del origen de los yndios...*)』）、以下『起源』と略記)の一部は、上述の『ラミーレス文書』の発見・出版と平行して、1860年に当時の所有者であったフィリップス(Sir Thomas Phillipps)によって出版されている [Lafaye 1972: 11]。

これでバーロウが扱うことになる5編のクロニカが出揃ったことになる。すなわち、アコスタの『インディアス自然文化史』第7書、ドゥランの『ヌエバ・エスパーニャ誌』第1巻（『歴史』）⁶⁾、テソモクの『クロニカ・メヒカーナ』、トバルの『ラミーレス文書』⁷⁾ および『起源』である。

まず、バーロウはこれら5編のクロニカの複雑な関連を説明し得る原典を想定し、『クロニカX』と名付けた。そして5編のうちアコスタが『起源』を利用したこと、『起源』と『ラミーレス文書』の間に2種の写本程度の相違しか認められないことを指摘し、『クロニカX』と直接的に関係し得たクロニカを3編に絞り込んだ。すなわち、ドゥラン、テソモク、トバル（『ラミーレス文書』=『起源』）である。その上でトバルには見出されない情報が残りの2編（ドゥランとテソモク）に共通して存在することを理由に、バーロウはトバルも『クロニカX』との直接的つながりがないとする。他方ドゥランはクロニカの本文中で原典の存在に言及し、テソモクも明言はしていないものの内容からして原典の存在が認められると考えたバーロウは、この両者のクロニカのもとになった文書が『クロニカX』であるとした。

こうして彼が指摘した『クロニカX』の特徴とは以下のようなものであった。

① 作者は先住民である。

ラミーレス以来の見解と同じであるが、バーロウはドゥランが省いたと述べている儀式の詳細、比喩的表現、予兆や幻影の強調、メシーカ人の残酷さに対する平然とした態度などをその理由に付け加えている。

② ナワトル語で書かれた。

テソモクがナワトル語の地名のスペイン語訳を書いていることと、ドゥランが「メシコ語から翻訳している」と言及していることがその理由に挙げられている。

③ 絵（もしくは線図）が含まれていた。

ドゥランと『ラミーレス文書』の絵の類似から本来の絵があったとバーロウは考え、実際に図版としてそれぞれから2種類の絵を示している（図2）。

④ 作成時期は1536～39年である。

バーロウはカソ (Alfonso Caso) が『ラミーレス文書』に残された土着の暦と西洋暦の対応をもとに計算したデータに基づいてこのように判断している。ただし、カソの計算は暦の対応が原典の執筆年のものであること、さらに土着の暦には閏年の調節がなかったことを前提としている⁸⁾。

先に引用したオロスコ・イ・ベラやチャペロ以外からも、バーロウが扱った5編のクロニカのうちのいくつかに関しては既に19世紀後半から類似性や共通の原文書の存在が指摘されていた。例えば、ボーヴォワ (Eugène Beauvois)、バンデリール (Ad. F. Bandelier)、ガルシア・イカサルセタ (Joaquín García Icazbalceta) といった当時の著名な学者たちがそれらの文書間の関係をバーロウ以前に論じている [Acosta 1962: lxxxvii-xc ; Lafaye 1972: 11-13]⁹⁾。したがって、バーロウの作業はそれら文書間の関係を体系的にまとめ、『クロニカX』という原文書の存在を明確に定義した点で評

価され、後世に影響を与えたものであった。

B) バーロウ以後と近年の研究

上述のようにバーロウは『クロニカX』を文字通り「創出」した。その結果、関連文書を扱う様々な研究者が基本的に『クロニカX』という文書の存在を受け入れてきた [Baudot y Todorov 1990[1994]: 50-51[58-59]; Colston 1977: 371-375; Garibay 1992(1953-54): 800; Lockhart 1992: 390; Vázquez 1987: 11]。だが、一方でバーロウが実在しない文書を作り上げてしまったことに反論する研究者もいた。ラファイエ (Jacques Layafe) は1972年に公刊された『起源』の序で次のように述べている¹⁰⁾。

この問題に関して、バーロウが指摘する意味での「クロニカX」という共通の文字史料の特徴を確定しようとするのは、誘惑的でありかつ根拠のないものと思われる。我々はまさしく謎を前にしているが、そこに存在する「X」という謎は決して解決しないものである。 [Lafaye 1972: 25]

このように『クロニカX』の仮説はその架空の存在を否定する研究者にとって見れば何ら根拠のないものであったものの、基本的には多くの研究者に受け入れられてきた。だが、最近になってこの仮説を再考する2つの論考が相次いで発表されたため、以下にそれらを要約しておく。

1995年ロメロ・ガルバンはバーロウが定義した『クロニカX』を見直す論考を発表した [Romero Galván 1995]。彼は原史料に立ち返ってバーロウの説を再検討し、トバルのクロニカ執筆過程を追い、その後、ドゥランとテソソモクのクロニカを再度検証する。ここで得られた結果は基本的にはバーロウの仮説を肯定するもので、ドゥランとテソソモクのさらに詳細な検討が必要であるとは述べているものの、これら両者のテキストが同一の原典に基づいていることを改めて結論づける。その上でロメロ・ガルバンは『クロニカX』の特徴に関しては一部バーロウ説の修正を行っているが、彼が挙げている順にその特徴とは以下の通りである [Romero Galván 1995: 148-150]。

- ① チャペロやバーロウの見解通りメシーカ=テノチカの歴史伝統に基づくものである。
- ② 1編もしくは複数の歴史的内容を持った絵文書 (コディセ) に基づき、口承伝統による補足的情報を加えたものである。
- ③ テソソモクとドゥランいずれのクロニカの中にも絵の存在について言及が一切なく、現段階で原典に絵が含まれていたと認めてしまうことは危険である。
- ④ 作成時期はバーロウの唱える1536~39年の間ではなく、トバルが失われた『第一の歴史書』を執筆し得た1576年以降、かつドゥランが『ヌエバ・エスパーニヤ誌』第1巻 (『歴史』) を書き上げた1581年以前である。
- ⑤ 作者は、(1) 絵文書の解説、ナワトル語、アルファベット表記を知る先住民だった (2) 既に指摘されている通り、メシーカ人だった (3) さらにメシーカ貴族の中心部にいるモクテスマ家の子孫だった (4) その名を明示することはできないものの、『クロニカ・メヒカーナ』の作者 (テソソモク) もしくは彼に極めて近い人物だったことが示唆できる。

①はバーロウ説通りであるが、②および⑤に関してはバーロウが指摘していなかったいくつかの

新情報が付加されている。他方、③と④はバーロウ説とは全く異なるあるいはそれに反対する見解である。③の絵の存在に関してはロメロ・ガルバンは現段階でその存在を認めるには至らないというだけでその可能性を否定しているわけではない。したがって今後の研究によってその有無が明らかになる可能性がある。だが、④の作成年代に関してはバーロウの見解を完全に否定するものであり、ロメロ・ガルバンが挙げているトバルとドゥランのクロニカ作成時期から『クロニカX』の作成時期を特定する方が論理的で、かつバーロウ説が不相当である理由としては説得力を持っている。

以上のように、ロメロ・ガルバンの論考はバーロウがもうけた前提を基本的には受け入れつつも、半世紀前に出された仮説の不十分な点を修正するものであった。

対照的に、ラファイエの批判を考慮した上で『クロニカX』を考え直そうとするのが1997年にテナが発表した論文である [Tena 1997]。テナは『クロニカX』の仮説を認めるものでもなければ完全に放棄するものでもないと予め断った上で、以下のような議論を展開している。

彼は『ラミーレス文書』と『起源』を検討し、前者が後者の写本であると主張する。その根拠として、後者の原稿にはアコスタとトバルの間での書簡が含まれている上、実際の手稿に当たればトバルのものだと確認できるであろう修正箇所があるという。さらに、後者に付属する『トバル・カレンダー』¹¹⁾はトバルの自筆であることと、前者の絵よりも後者のそれの方が技術的・美術的に優れていることもテナは挙げている。これに基づいて彼はトバルの歴史書すなわち『起源』が1583～86年に作成され、『ラミーレス文書』はそれ以降の16世紀末と判断している。テナが考える各クロニカ間の関係は従来の説と何ら変わらない。つまり、アコスタはトバル、トバル（『起源』と『ラミーレス文書』）は（少なくとも部分的に）ドゥランに由来し、残ったテソモクとドゥランが共通の情報源に基づくというものである。だが、ここから先のテナの解釈は従来のものとは大きく異なる。テソモクはドゥランが利用したのと同様あるいは近似したナワトル語文書を利用した以外に、トバルが失われた『第一の歴史書』執筆の際に行ったのと同様に口承伝統を直接用いて『クロニカ・メヒカーナ』を書いた可能性を彼は考えている。その結果、テナの結論は、トバルの最初の歴史書、ドゥランの原典となった歴史書、そしてテソモクのクロニカという3つのもとなった口承伝統を『クロニカX』と呼ぶべきだというものである。

テナ以前にはコルストンがドゥランとテソモクの両クロニカの類似が口承伝統で結び付けられているのではないかという推測を表明していたが、最終的に彼は文書の存在を前提として議論を進めた [Colston 1977: 371n]。それから20年後のテナの論考はこの疑問に正面から取り組み、文書ではなく口承伝統としての『クロニカX』を仮説として提示した点で評価される。

3. 『クロニカX』

A) 『クロニカX』文書説と口承伝統説

テナ自身が述べているように、彼の仮説はバーロウ説とそれを否定するラファイエの見解を折衷させようと試みたものではある。だが、彼の主張する『口承伝統・クロニカX』とバーロウからロメロ・ガルバンに至る『文書・クロニカX』の溝は依然大きいといわざるを得ない¹²⁾。この溝を埋めることは不可能である。というも、両者のいう『クロニカX』とは明らかに別の実体を指しているためである。

この点を明らかにする上で、まずはバーロウ以後に指摘されてきたトバルのクロニカ執筆の経緯に触れておく必要がある。トバルの著作もしくはその写本で現存するのは『ラミーレス文書』

と『起源』の2編であり、これらは同一のクロニカの異本である。このクロニカ以外にトバルはより早い時期にもう一つ別の作品を残していた。この『第一の歴史書』は現存しないものの、実在したことは確認されている。

1572年、第4代ヌエバ・エスパニーヤ副王マルティン・エンリケスは国王フェリペ2世の命を受けて同地の故事を知る目的でメヒコ、テスココ、トゥーラから絵文書を集め、イエズス会の神父ファン・デ・トバルに歴史書を作成するよう依頼した。トバルの歴史書執筆に当たってはメヒコ、テスココ、トゥーラの古老数名が集められて絵文書の解釈に協力し、その作業は1576年から1577年にかけて行われた [Romero Galván 1995: 146 ; Vázquez 1987: 10-11]。トバルによるこの『第一の歴史書』は国王に届けられた形跡もなく、現在も発見されていない。トバル自身の証言によれば、この『第一の歴史書』は、「メヒコ、テスココ、トゥーラの賢者たち」が「特定の事柄を順に述べ、語りながら」作成された歴史書であるという [García Icazbalceta 1947: IV, 90]。

その後、トバルは現在『ラミーレス文書』および『起源』として伝わっている『第二の歴史書』を執筆した。現存する2つの文書のうち前者を原本と見なす研究者 [Couch 1991] と後者をオリジナルと考える研究者 [Tena 1997: 167-168 ; Vázquez 1987: 12] の間で意見が分かれるが、確かなことは『ラミーレス文書』と『起源』が同一のクロニカ（『第二の歴史書』）の異本だということである [Alcina Franch 1992: 122]。トバルは、『第一の歴史書』を執筆した時の記憶とその作成時の絵文書の内容に合致した歴史書（ドゥランのクロニカ）をもとにこのクロニカを書き上げたと述べている [García Icazbalceta 1947: IV, 91]。したがって『第二の歴史書』は『クロニカX』に関する議論とは直接的に関係しない。

他方、ドゥランの『歴史』は1581年、テソソモクの『クロニカ・メヒカーナ』は1598年頃にそれぞれ脱稿された。上述のようにトバルの『第一の歴史書』はこれらよりも早く1576年～1577年に執筆されていた。そこでドゥランがナワトル語文書をもとに『歴史』を執筆したと述べていること、テソソモクが明確な情報源を明らかにしていないことを踏まえた上で情報を整理したものが表1である。

バーロウやバーロウ説を修正したロメロ・ガルバンは、A-1が文字化されたものを『クロニカX』という文書であると考え、さらにそれがA-2、A-3と同一であると想定している。一方、テーナはA-1の口承伝統を『クロニカX』と呼ぶべきだとしており、かつそれがA-2の情報源、A-3と同一であると考えている。しかしながら、テソソモクが『クロニカ・メヒカーナ』作成にあたって利用した情報（A-3）が口承伝統であったか文書であったかは明らかにされていない。そこで、この段階では以下の3つの可能性が考えられると述べておくのが妥当であろう。すなわち、1つめはA-1、A-3、そしてA-2の情報源のいずれもがテーナの言うように共通した「口承伝統」だった可能性。この場合、ナワトル語の口承伝統の担い手がトバルに語った約20年後にテソソモクと接触を持ち得たかどうかが問題となるが、テソソモクがメシコ=テノチティトランのトラトアニになり得る地位の人物だったことを考えれば不可能ではなかったであろう¹³⁾。2つめはA-1の口述が文字化され、『文書・クロニカX』が作成されてドゥランとテソソモクに利用された可能性。最後にA-1は文字化されたものの、文書は1編ではなく複数の異本が存在した、すなわちドゥランとテソソモクが別の文書をもとにしたという可能性。この場合、『クロニカX』は「文書群」と呼び得ることになる¹⁴⁾。

結論としては、バーロウやロメロ・ガルバンが考えるような文書の存在（A-1が文字化されたもの=A-2=A-3）を証明することも否定することも現段階では不可能であると言わざるを得ない。ま

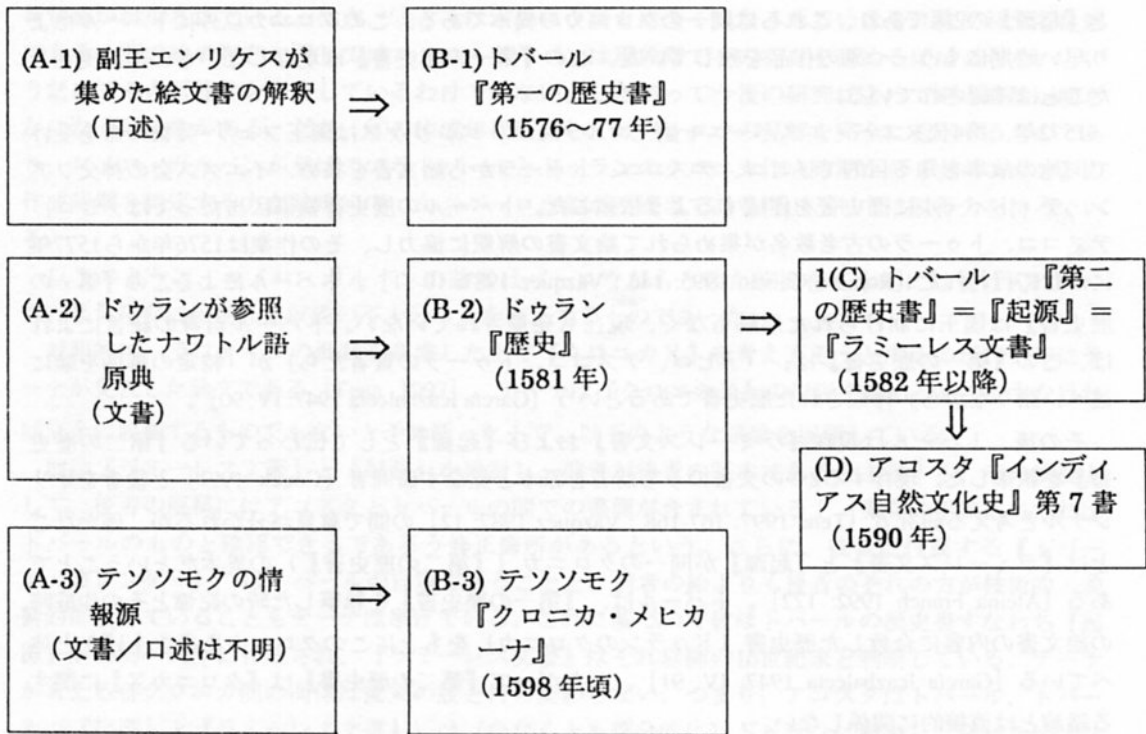


表1 『クロニカX』系の諸クロニカにおける情報の流れ

た、テーナの主張する『口承伝統・クロニカX』（A-1=A-2の情報源=A-3）も現時点では裏付けが困難であくまで仮説としか言えない。しかし、トバル『第一の歴史書』の情報源となったA-1が口述であったことは少なくとも史料の上から確実である。そこでテーナ説のようにこれをA-2・A-3と結び付けることなしに、ここではこのA-1のみを『口述・クロニカX』と呼ぶことを提案したい。すなわち、『口述・クロニカX』とは、バーロウ説から見れば『文書・クロニカX』の情報源であり、テーナ説における『口承伝統・クロニカX』と同一ということになる。このように考えれば、『口述・クロニカX』の存在は仮説的でない上、バーロウ説・テーナ説いずれの仮説に拠って立つとしてもその情報が最終的にドゥランとテソソモクの両クロニカに伝えられたことは確かだといえる。したがって以下では『口述・クロニカX』の特徴を簡潔に指摘しておきたい。

B) 『口述・クロニカX』の特徴

① 絵文書

『口述・クロニカX』は絵文字による詳細な記録をもとに語られたものである。数多くの人物名の正確な記述、軍勢や生贄に捧げられた人物の数字などからそのことは明らかである¹⁵⁾。ではどのような絵文書が利用されたのだろうか。『口述・クロニカX』に立ち会ったトバルは次のように証言している。

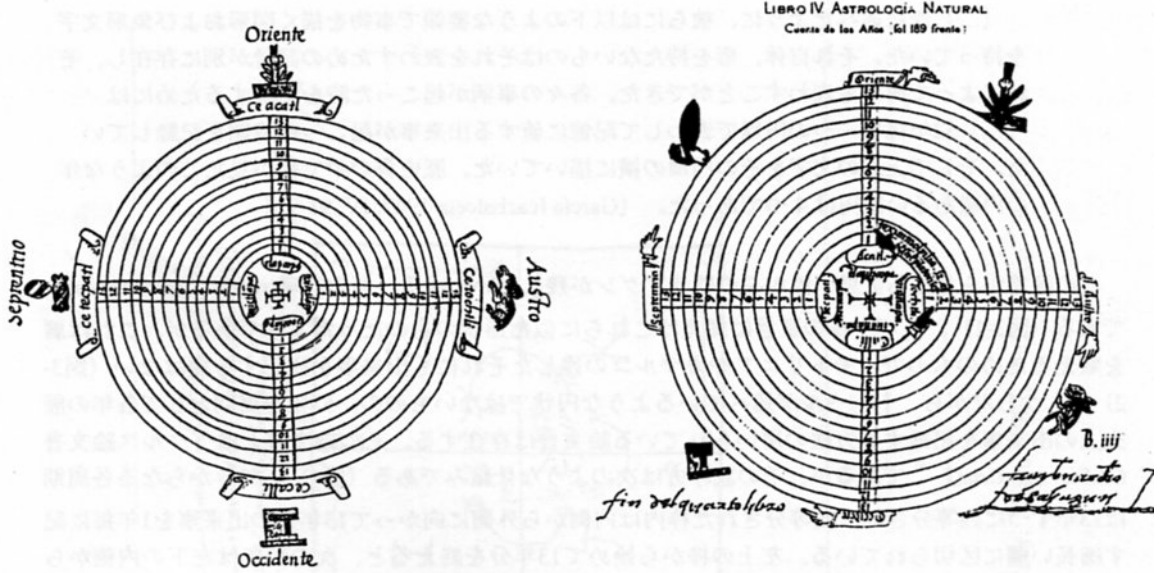


図 3-1 サアグンの 52 年を表わす円環 (左 : Códice Florentino, Libro VII, 右 : Memoriales en Tres Columnas, Libro IV、共にバツ・イ・トロンコソの写本による)

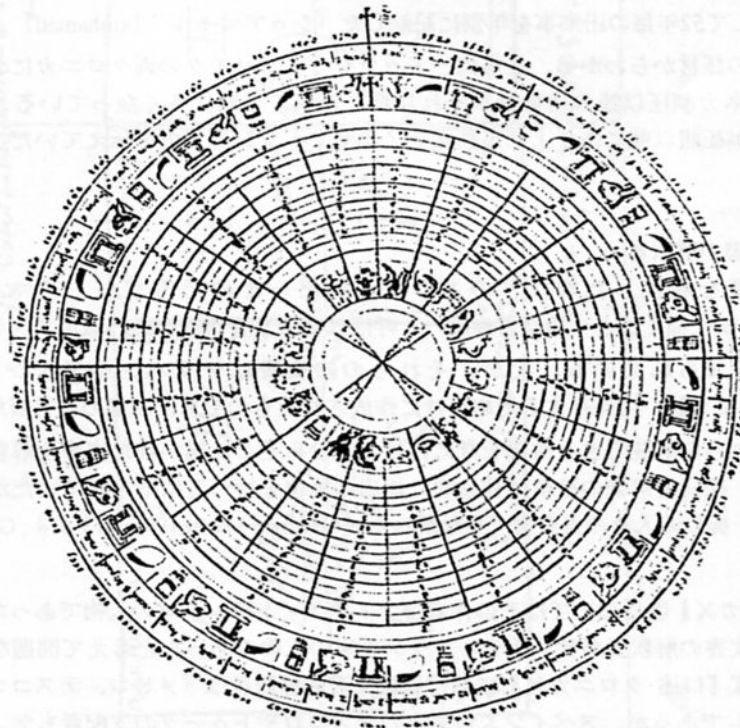


図 3-2 ムニョス・カマルゴのトラスカラ地誌報告書に残されている円環

(Acuña, René , *Relaciones geográficas del siglo XVI: Tlaxcala, tomo primero*, UNAM, México, 1984)

[...] 既に述べたように、彼らには以下のような要領で事物を描く図形および象形文字を持っていた。それ自体、形を持たないものはそれを表わすための記号が別に存在し、それによって何でも表わすことができた。各々の事柄が起こった時を記録するためには
 [...] 52年毎を一つの円環で表わして記憶に値する出来事が起こった時期を記録していた。そして上述の文字をその円環の横に描いていた。歴史書の中で私が見たこのような年の円環あるいは円は4つであった。 [García Icazbalceta 1947: IV, 91-92]

この証言からただちに思い浮かぶのはサアグンが残したいわゆる「暦の円環(rueda calendárica)」である(図3-1)。トバルの証言に従えばこれらに似た形状のものだったようであるが、これは暦を数えるためのもので、モトリニアやカマルゴの残したそれにも出来事を注記する欄はない(図3-2)。しかしながら、トバルが述べているような円状ではないものの、52年を周期として各年の歴史上の出来事を記録する方法の用いられている絵文書は存在する。その絵文書とは『クルス絵文書 *Códice en Cruz*』¹⁶⁾であるが、その読み方は次のような仕組みである(図4)。52年からなる各周期は13年ずつに四等分され、四等分された枠内は内側から外側に向かって13年分の出来事を1年毎に記す細長い欄に区切られている。左上の枠から始めて13年分を終えると、次の13年は左下の内側から始まる。この要領で右下→右上の順に進み、右上の13年が終わったところまでで52年すなわち一周期分の記録が記される。上で引用したトバルの証言はこのようなものが4周期分残されていた、すなわち約2世紀分の歴史的記録があったことを示唆している。

したがって、『口述・クロニカX』に利用された絵文書は複数であったと思われるものの、その中の主なものとして52年毎の出来事を年別に記録した「シウアマトル (xihuahmatl)」¹⁷⁾が存在したことがトバルの証言からわかる。さらに、ドゥランとテソソモクの両クロニカにおいてイツコアトルによるテパネカ制圧以後の情報量がそれ以前に比べて急激に多くなっていることを考慮すれば、この絵文書が征服以前に作り上げられたテノチティランの正史を伝えていたことは明白である。

② 語り手=絵文書の解釈者

上述の絵文書を解釈したのはどのような人物だったのだろうか。アマトラクイロリ (amatlacuilolli、紙に描くこと=絵文書作成) と呼ばれた絵文書作成の専門職がアステカ期の社会に存在したことは知られている。だが、それらの絵文書はテクパンやアモシユピアロヤン (amoxpialoyan、文書館) に保存するためだけに作成されたものでも、一部の神官層だけの占有物でもなかった。それらを解読できる教養を身に付けた者ならそこに描かれた内容を解釈することができた。すなわち、絵文書解読の技術は社会的に相応の地位を持つ者に限られていたが、特殊な職業に従事するごく一握りの人々の占有物でもなかった [Martínez Marín 1996: 413-414; Galarza 1990: 18-19]。

『文書・クロニカX』説においてはその作者がテノチティラン王家の人物であったと指摘されてきた。実際、絵文書の解釈者がテノチティラン王家の人物であったと考えて問題ないであろう。トバルによれば『口述・クロニカX』における絵文書の解釈者は「メヒコ、テスココ、トゥーラの賢者たち(sabios)」であるが、スペイン人到来時のテスココやトゥーラの支配者もテノチティラン王家の人物であった。モクテスマ2世の息子の一人はトゥーラ(トラン)のトラトアニになっており、テスココのトラトアニはトラカエレルの曾孫もしくはモクテスマ2世の甥にあたるカカマであっ

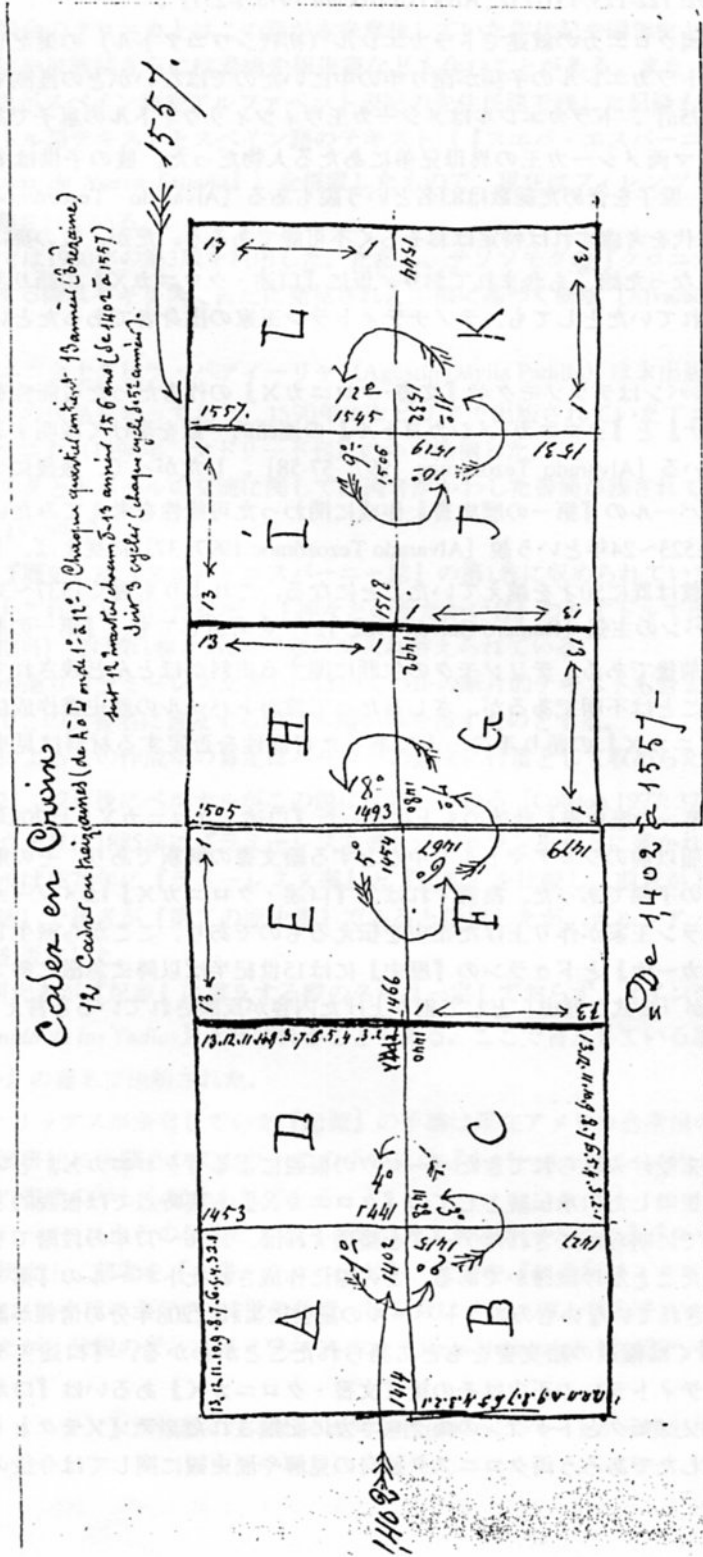


図4 『クルス絵文書』の読み方
 (Dibble, Charles E., *Codex en Crux*, Univ. of Utah Press, Salt Lake City, Utah, 1981, Vol. II pp. 6-7.)

た [Alvarado Tezozómoc 1992: 122-123, 151-152 ; Alva Ixtlilxóchitl 1975: I-257] 。

ドゥランとテソソモクの両クロニカの叙述でトラカエレル(初代シワコアトル)の果たした役割が強調されていることからトラカエレルの子孫が語り手の中にいたのではないかとの推測も可能である [Cfr. Colston 1977: 375n]。トラカエレルはメシーカ王ウィツィリウィトルの息子であり、チマルポポカと初代モクテスマ両メシーカ王の異母兄弟にあたる人物だった。彼の子供は名前が分かっているだけでも16名で、庶子を含めた総数は83名という説もある [Alvarado Tezozómoc 1992: 122-129] ため、孫以降の世代を考慮すれば特定はおそらく不可能であろう。だが、彼の孫にはメシーカ王モクテスマ2世の妻になった娘¹⁸⁾も含まれており、仮に『口述・クロニカX』の語り手の中にトラカエレルの子孫が含まれていたとしても、テノチティトラン王家の出身者であったといえることができる。

上で見た通りロメロ・ガルバンはテソソモクが『文書・クロニカX』の作者だった可能性を示唆した。『クロニカ・メヒカーナ』と『クロニカ・メシカヨトル』の逐語的一致を挙げて説明するバスケスもこれに近い指摘をしている [Alvarado Tezozómoc 1997: 57-58]。したがって、最後にテソソモク自身が1570年代後半にトバルの『第一の歴史書』作成に関わった可能性を考えてみたい。テソソモクの生年が征服直後の1523~24年という説 [Alvarado Tezozómoc 1997: 37] に従えば、トバルの作業が行われていた頃に彼は既に50才を越えていたことになる。これよりも遅く1537~38年に生まれたとするロメロ・ガルバンの主張 [Romero Galván 1982: 121] を考慮しても、『第一の歴史書』作成時にテソソモクは40才前後である。テソソモクの生涯に関する史料がほとんど残されていないため現時点ではこれ以上のことは不明であるが、さし当たって彼がトバルの歴史書作成に携わった、すなわち『口述・クロニカX』の語り手の一人であった可能性を否定する材料は見当たらない。

このようにトバルの『第一の歴史書』執筆のもとになった『口述・クロニカX』は208年分の情報が記されたおそらくは征服以前のシウアマトルを中心とする絵文書の解釈であり、その解釈者たちはテノチティトラン王家の子孫であった。換言すれば、『口述・クロニカX』はメシーカ人の中でもとりわけテノチティトラン王家が作り上げた正史を伝えるものであり、ここから派生したテソソモクの『クロニカ・メヒカーナ』とドゥランの『歴史』には15世紀半ば以降に急激に勢力を拡大したテノチティトラン王家が「公式な歴史」として創り上げた内容が反映されていると言える。

4. おわりに

多くの研究者によって従来受け入れられてきたバーロウの仮説による『クロニカX』という文書の存在も、新たにテーナが提唱した口承伝統としての『クロニカX』も現時点では仮説的といわざるを得ない。だが、今日までに明らかにされたデータを整理すれば、1576~77年の段階でそれらのもとになった口述がなされたことだけは確かである。この際に作成されたトバルの『第一の歴史書』は現在に至るまで発見されていないものの、トバルの証言によれば208年分の情報が記されたシウアマトルを含むおそらくは複数の絵文書をもとに語られたことがわかる。『口述・クロニカX』として語られたテノチティトランの正史はその後『文書・クロニカX』あるいは『口承伝統・クロニカX』を経由してテソソモクとドゥランの両クロニカに記録された。テソソモクとドゥランのクロニカが執筆時に介在したであろう両クロニスタ独自の見解や歴史観に関しては今後の課題としたい。

注

- 1) この場合のクロニカとはこの語が本来意味していた年代記や編年史といった歴史書のみならず、博物誌や民族誌さらには書簡や報告書なども含むことがある。また、被支配者であるインディオや混血がスペイン語やアルファベット表記の先住民語で残した記録もその範疇に含まれる。
- 2) ナワトル語テキストとスペイン語のテキスト（『ヌエバ・エスパーニャ総覧 *Historia general de las cosas de Nueva España*』）を併置したもので、現在はフィレンツェのラウレンツィアナ図書館に保存されている。
- 3) 拙稿では1980年の第3版を利用した。ただし、テソソモクの『クロニカ・メヒカーナ』の記述に言及する際はイギリスで新たに発見された手稿に基づく新版 [Alvarado Tezozómoc 1997] を参照した。
- 4) ドミニコ会士ダビラ・パディーリャ (Agustín Dávila Padilla) は未出版だった同じドミニコ会士ドゥランの作品を知っており、1590年にセビリアで出版されていたアコスタの記録との類似を自らのクロニカ (1596年、マドリード刊) の中で指摘した。
- 5) アコスタとトバルの交流に関しては両者がかわした書簡が残されている [García Icazbalceta 1947: IV, 89-93]。
- 6) 本来『歴史』は『ヌエバ・エスパーニャ誌』の第1巻に収められていたが、1967年のガリバイ校訂版とこれに基づいた諸版（『神々とのたたかいII』のタイトルで出版された日本語の抄訳もこれに相当）では第1巻と第2巻の順序が入れ替えられている。
- 7) 上述の通り『ラミーレス文書』にはいくつかの断片的テキストも含まれているが、以下、本稿においてこの文書名に言及する際は本編のみを指すものとする。
- 8) カソによるこの作成年の算定はバーロウの論文に付篇として収められたもので [Barlow 1990(1945): 31-32]、2年後にベルナルがこの説に反論している [Colston 1977: 372]。
- 9) ボーヴォワは1885年に『ラミーレス文書』がドゥランをもとに書かれたと指摘している。バンデリールは1879年に『ラミーレス文書』と『起源』を比較し、前者がトバル『第一の歴史書』（後述）で後者が『第二の歴史書』であると指摘したが、ガルシア・イカスバルセタは1881年にこれを否定した。
- 10) 各研究者が『起源』に言及する際の名称は一定しておらず、『インディオ到来の歴史 *Historia de la Benida de los Yndios*』と呼ばれることもある。ここで言及している版は『トバル手稿 *Manuscrit Tovar*』の題名で出版された。
- 11) フィリップスが所有していた『起源』の手稿は現在アメリカ合衆国のジョン・カーター・ブラウン図書館に所蔵されており、この手稿には『トバル・カレンダー』およびアコスタ、トバル間の書簡の写しも収められている。
- 12) 以下、バーロウらの仮説による『クロニカX』とテーナによる『クロニカX』を区別するため、便宜上、前者を『文書・クロニカX』、後者を『口承伝統・クロニカX』と呼ぶ。
- 13) テソソモクはモクテスマ2世の孫で、彼自身はメシコのトラトアニ=ゴベルナドールにはならなかったが、父親のディエゴ・ワニツィン (Diego Huanitzin) は1539~42年にその役職を務めている。
- 14) 『クロニカX』が複数の文書だった可能性はロックハートが示唆している [Lockhart 1992: 390]。

- 15) 例えば、テパネカ人との戦争に勝利した後イツコアトルが称号を与えた21名もの人物名とその称号の一覧 [Durán 1995: I-148 ; Alvarado Tezozómoc 1997: 109-110]、ドゥランが不正確だと批判する生贄に捧げられた人間の数やメシーカ人による征服戦争の際の軍勢や死者の数が尽く20の倍数であること [Durán 1995: I-404 ; Alvarado Tezozómoc 1997: 165, 231, 313, 348, 401] がそれを示している。
- 16) *Codex en Croix*あるいは*Anales de San Andrés Chiautla*の別名がある。また、オバン (Joseph M. A. Aubin) は *Anales de Cuauhtitlan, de Texcoco et de Mexico* と呼んでいる。15世紀初頭から16世紀中葉までの156年 (3周期分) の歴史を扱ったもので、テスココ地方で作成されたものと思われる [Alcina Franch 1992: 127]。
- 17) ナワトル語で「年の本」あるいは「年代記」の意味。
- 18) トラカエレルの亡き後シワコアトルの地位に就いた次男トリルポトンカトルの長女 [Alvarado Tezozómoc 1992: 125]。

参考文献

Acosta, Joseph de

1962[1966] *Historia natural y moral de las Indias*, Ed. de Edmundo O’Gorman, Fondo de Cultura Económica, México. (『新大陸自然文化史』増田義郎訳、上下巻、岩波書店)

Alcina Franch, José

1992 *Códices mexicanos*, Mapfre, Madrid.

Alva Ixtlilxóchitl, Fernando de

1975 *Obras históricas*. Ed. de Edmundo O’Gorman, 2 vols, UNAM, México.

Alvarado Tezozómoc, Hernando [de]

1980(1878) *Crónica mexicana, precedida del Códice Ramírez*. Ed. de Manuel Orozco y Berra, Porrúa, México.

1992 *Crónica mexicáyotl*. Trad. de Adrián León, UNAM, México.

1997 *Crónica mexicana*. Ed. de Gonzalo Díaz Migoyo y Germán Vázquez Chamorro, Historia 16, Madrid.

青山和夫・猪俣健

1997 『メソアメリカの考古学』、世界の考古学②、同成社。

網野徹哉

1995 「植民地体制とインディオ社会—アンデス植民地社会の一断面」、歴史学研究会編『講座世界史2 近代世界への道—変容と摩擦』、東京大学出版会、127～157頁。

Barlow, Robert H.

1990(1945) “La ‘Crónica X’: versiones coloniales de la historia de los mexica tenochca”, en Jesús Monjarás-Ruiz, Elena Limón, María de la Cruz Paillés H. (eds.), *Obras de Robert H. Barlow, vol. 3: Los mexicas y la triple alianza*, pp. 13-32, INAH-Universidad de las Américas, Puebla, México.

Baudot, Georges y Tzvetan Todorov

1990[1994] *Relatos aztecas de la conquista*. Grijalbo, México. (『アステカ帝国滅亡記—インディオによる物語—』菊池良夫・大谷尚文訳 法政大学出版局、フランス語版からの邦訳)

- Colston, Stephen A.
1977 "A Comment on Dating the 'Crónica X'", *Tlalocan*, VII: 371-377.
- Couch, Christopher
1991 "The Codex Ramírez: Copy or Original?", en *Estudios de Cultura Náhuatl*, 21: 109-125.
- Durán, Diego
1995 *Historia de las Indias de Nueva España e islas de Tierra Firme*. Ed. de Rosa de Lourdes Camelo y José Rubén Romero Galván, 2 vols, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes (Cien de México), México.
- Galarza, Joaquín
1990 *Amatl, amoxtli. El papel, el libro. Los códices mesoamericanos. Guía para la introducción al estudio del material pictórico indígena*. Tava, México.
- García Icazbalceta, Joaquín
1947(1881) *Don fray Juan de Zumárraga, primer obispo y arzobispo de México*. 4 tomos, Porrúa (Colección de Escritores Mexicanos), México.
- Garibay K, Ángel María
1992(1953-54) *Historia de la literatura náhuatl*. Porrúa (Sepan Cuantos...), México.
- Lafaye, Jacques (ed.)
1972 *Manuscrit Tovar. Origines et Croyances des indiens du Mexique*. Akademische Druck. u. Verlagsanstalt Graz, Austria.
- Lockhart, James
1992 *The Nahuas After the Conquest. A Social and Cultural History of the Indians of Central Mexico, Sixteenth Through Eighteenth Centuries*. Stanford Univ. Press, Stanford, California.
- López Austin, Alfredo y Leonardo López Luján
1996 *El pasado indígena*, Fondo de Cultura Económica, México.
- Martínez Marín, Carlos
1996 "El registro de la historia", en Sonia Lombardo y Enrique Nalda (coords.), *Temas mesoamericanos*, pp. 397-425, INAH, México.
- Romero Galván, José Rubén
1982 "La Crónica Mexicana de Hernando Alvarado Tezozómoc, Manifestation d'une conscience de peuple conquis chez un auteur indigène de XVI siècle", Tesis inédita de doctorado, París.
Traducción española del autor.
1995 "La Crónica X: algunas consideraciones más", en Jacqueline de Durand-Forest et Georges Baudot (eds.), *Mille ans de civilisations mésoaméricaines. Des Mayas aux Aztèques. La quête du cinquième soleil*, pp. 143-151, Éditions L'Harmattan, Paris.
- 染田秀藤
1995 『大航海時代における異文化理解と他者認識—スペイン語文書を読む』 溪水社。
1998 『インカ帝国の虚像と実像』 講談社選書メチエ。

Tena, Rafael

- 1997 "Revisión de la hipótesis sobre 'La Crónica X' ", en Salvador Rueda Smithers, Constanza Vega Sosa, Rodrigo Martínez Baracs (eds.), *Códices y documentos sobre México. Segundo Simposio*, Vol. II, pp. 163-178, INAH, México.

Vázquez, Germán (ed.)

- 1987 *Origen de los mexicanos*. Historia 16, Madrid.